



Title	ソ系列指示詞による聞き手領域の形成
Author(s)	藤本, 真理子
Citation	語文. 2008, 90, p. 40-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69106
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ソ系列指示詞による聞き手領域の形成

藤 本 真 理 子

一 はじめに

現代日本語指示詞におけるソ系列指示詞（以下ソ系列と称し、他もそれに準ずる）の現場指示用法には大きく分けて次の二つの用法がある。

（１）聞き手領域指示

（聞き手の着ている服を見て）「その服かわいいね」

（２）中距離指示

（郵便局までの道を聞かれ）「そこの角を曲がって100 m先にあります」

（１）は人称区分的な聞き手領域指示、（２）は距離区分的な中距離指示の用法の典型的な例である。これらソ系列の用法のうち、中距離指示は「ソ本来の意義ではなく、見せかけのもの」（金水・田窪一九九二）とされており、一方の聞き手領域指示も、「プリミティブな用法というより、コミュニケーション上の要請

により隙間を埋める充填剂的な手段として適用されている」（金水一九九九）と見ることができる。実際、これらの用法は本来的なものとは言えず、韻文資料という資料の制約はあるものの、上に代にソ系列の現場指示の確例と認められる例はない（清水一九六二・橋本一九六六）。

では、ソ系列は、いつ頃、どのようにして現場指示の用法を獲得したのか。本稿は、現場指示用法のうちでも、特に聞き手領域指示に着目し、ソ系列による聞き手領域指示用法の発生の道筋を検討する。まず、聞き手領域の指示を整理した上で、中古から散見される、一見聞き手領域指示的なソ系列の例の扱いを述べる。そして、このソ系列の聞き手領域指示確立の過程において、これまでも示唆されている場所指示の重要性について、改めて客観的に証拠を示し、その役割を明確にすることを目指す。

二 聞き手領域の指示

現代語では、(3)のように、聞き手領域に属するとみられる対象を、ソ系列で指示することはできるが、ア系列で指示することはできない。

(3) (聞き手の着ている服を見て) (その／＼あの) 服かわいいね。

しかし、古代語では、カ(ア)系列が聞き手の領域に属する対象を指示する例が確認できる。

(4) 「小君」戸をやをを押し開くるに、老いたる御達の声にて「あれは誰ぞ」とおどろおどろしく問ふ。わづらはしくて、「小君」「まろぞ」と答ふ。【あなたは】(源氏物語、空蟬、

①127頁)

また、(5)からは、古代語では、現代語の聞き手領域に含まれる対象にソ系列・カ(ア)系列いずれを用いて指示することも可能であったことが分かる。

(5) a 木曽殿箸ヲ取テラビタ、シキ様ニ食ケレドモ、中納言ハ青醒テオワシケレバ、「何ニメサヌゾ。合子ヲ嫌ヒ給フカ。

アレハ義仲ガ観音講ニ一月ニ一度スウル精進合子ニテ候ゾ。」(延慶本平家物語(1307)、下、146頁)

b 田舎合子のきはめて大に、くぼかりけるに、飯うづだかくよそる、「……」。木曽がまへにもおなじ鉢にてすへたりけり。木曽殿と(ッ)て食す。猫間殿は、合子のいぶせさに

めさざりければ、「それは義仲が精進合子ぞ」。(覚一本平家物語(1371)、下、巻第八、猫間、140頁)

そのため、古代語では、聞き手領域が否かによる使い分けそのものが、現代語と同じように存していたか疑わしい。

では、ソ系列の、一見、聞き手領域指示的な例はいつ頃から現れるのか。先に述べた通り、上代、ソ系列には、聞き手領域指示の確例はなく、文脈照応用法が主用法であった。中古に入ると、ソ系列には聞き手領域指示らしい例が見え始める。

(6) この券を、この越前守の取りて立ちければ、北の方、返したてまつるにやあらむと、いとあやしくて、「北の方、越前守」「それはなど持ていく。さのたまひつらむものを、持て来、持て来」(落窪物語、卷之四、298頁)

しかしながら、(6)は、文脈照応用法とも考えられ、聞き手領域を指示するためにソ系列が用いられたとは言いがたい。中古に見える、一見聞き手領域指示的なソ系列に、このような例が多いことは次節の調査によって明らかにする。

三 聞き手領域指示の検討

三・一 対象資料及び分類方法について

調査対象は、話し手、発話時、発話場所、聞き手などが明らかなるものを扱うことが望ましいため、中古・中世の物語作品の会話文を中心に取り上げる。対象とする資料において、会話文と地の文とは、境目がはっきりとしておらず、連続的なものである。そ

のため、聞き手領域指示らしい例と一口に言っても、ソ系列が聞き手領域に属する対象を指し示す例は、文脈照応用法との関連の中で、いくつかの段階に分けて考えることができる。文脈照応の用法を、可能なかぎり広く捉え、聞き手領域指示の可能性をできるだけ厳しく見るため、ソ系列の聞き手領域指示的な例を、先行詞があるかないか、ある場合どこにあるのかという観点からA、C、そして対称代名詞の用法Dに分類する。

三・二 調査結果

表1は中古、表2は中世に書かれたとされる作品を対象に調査した結果を示した。中古・中世を通して、ソ系列の主用法は、(7)の文脈照応用法であり、その他、(8)のような観念指示の用法がある。

(7) a 「北の方へ越前守」かの所をこそさも領ぜられめ、このとしごろ造りつる草木を、もの入れて。それ運び取り給へ。」
(落窪物語、巻之三、203頁)

b 「守源氏」「いとかしこき仰せ言にはべるなり。姉なる人にのたまひみむ」と申すも胸つぶれて思せど、(源氏下守)「その姉君は朝臣の弟妹やもたる」(源氏物語、帚木、①105頁)

(8) 「玉鬘」「その昔は若う心もとなきやうなりしかど、めやすくねびまさりぬべかめり」【あの昔】(源氏物語、竹河、⑤106頁)

表1 中古会話文における聞き手領域指示的なソ系列

ソ	A. 同一場面、先行発話中に先行詞がある	B. 会話文と地の文の境がないとした場合、先行文脈に先行詞あり	C. 会話文と地の文の境がないとした場合でも、先行文脈に先行詞なし	D. 対称代名詞	計	会話文中に現れるソ
竹取	0	0	0	0	0	26
伊勢	0	0	0	0	0	2
平中	0	1	0	1	2	16
大和	0	1	0	1	2	11
うつほ	0	4	2	65	71	736
落窪	0	3	1	11	15	77
枕	0	4	4	2	10	78
源氏	0	4	1	13	18	352
堤中	1	1	0	0	2	23
更級	0	0	0	3	3	17
讃岐	0	2	1	1	4	21
計	1 (0)	20	9	97	127	1359

表2 中世前期の会話文における聞き手領域指示的なソ系列

ソ	A. 同一場面、先行発話中に先行詞がある	B. 会話文と地の文の境がないとした場合、先行文脈に先行詞あり	C. 会話文と地の文の境がないとした場合でも、先行文脈に先行詞なし	D. 対称代名詞	計	会話文中に現れるソ
平家	3 (1)	5	2	7	17	249
宇治	7 (1)	8	3	8	26	273
古著	4 (1)	7	1	7	19	178
計	14 (3)	20	6	22	62	700

※表1、2の()内は直前に談話を想定可能な例

またAとD群では、A、B群が、それぞれ先行詞があると捉えられ、聞き手領域指示の用法とも文脈照応用法ともとれる曖昧な例である。次にその例を挙げた。(9)(10)の波線部は先行詞と考えられる箇所である。

(9) A群〈同一場面、先行発話中に先行詞がある場合〉

下人が馬をかふとて、「にっくい馬」のながぐらひかな」とて、うちければ、平山↓下人「かうなせそ、其馬」のなごりもこよひばかりぞ」とて、うったちけり。(平家物語、巻第九、一二之懸、②206頁)

(10) B群〈会話文と地の文の境がないとした場合、先行文脈に先行詞あり〉

「女の父母が」姫君の顔を見れば、いとむくつけくなりぬ。おびえて、父母も倒れ臥しぬ。むすめ、「など、かくはのたまふぞ」と言へば、「その御顔は、いかになりたまふぞ」とも、え言ひやらす。(堤中納言物語、はいずみ、497頁)

A、B群を聞き手領域指示の例として扱うには、問題がある。

A群は、同一場面の発話内に先行詞があり、文脈照応用法として捉えられる。B群もまた、現代語の感覚から見ると、一見、聞き手領域指示として何の問題もないかに見えるが、中古・中世の仮名文学作品では、これらの例は解釈上、グレイゾーンに残される。このようなグレイゾーンの例を整理すると、先行詞がなく、かつ聞き手に近い範囲にある対象を指していると考えられるのは、D群を別にすると、(11)のようなC群のみである。

(11)

a (女君↓少納言)「心地のあしければなむ。その縫ひさしたるは髪前縫ひたまへ」と言へば、取り寄せて縫ひて、(少納言↓女君)「なほよろしうは起きさせたまへ。この髪おばえはべらず」(落窪物語、巻之二、87頁)

b (敵の人↓下衆男)「さらば、門をば開け給はずとも、その遣戸から顔をさしいで給へ。」(宇治拾遺物語 下、122、巻一〇ノ九、260頁)

このC群は、表1、2ともに多くなく、中古では特に少ない。中古の聞き手領域指示的なソ系列の例において、その可能性の高いものは僅かであり、安易にソ系列に聞き手領域指示の用法を認めることはできないことが分かる。

三・三 データの扱いについて

次節以降、C群のデータを中心に考察を進める。ただし、C群は中古9例、中世6例と例数が少ない。

また、D群には、対称代名詞として、次のような例が含まれる。(12)「源氏↓夕霧」「そこにこそは、門はひろげたまはめ」【あな

た】(源氏物語、幻、④541頁)

(12) 以外に、C群にも(13)のような人稱を指す例がある。

(13) 歌仕うまつりなどするほどに、藤中将、源中将など、声たぐひなし。「進行役の者↓式部卿」「もの奉る人を片去りて奉れ。そのなにがし、面を」といふ。【その誰それ】(うつほ物語、菊の宴、②32頁)

その他、(14)のように、カ(ア)系列にも人称もしくはそれに近いものを指す例が見られる。

(14) a 仲忠、(↓涼)かれは誰ぞ」といふ。〔涼〕「涼」といふへていふ。【あなた】(うつは物語、内侍のかみ、②216頁)

b 五宮の御室、「…」かほすがたさすが人のやうなりながら、かわほりのつらに似たるまいりて、御前に候けるを、
「あれはなにものゝ容態ぞ」と仰られければ、「をのれは餓鬼にて候也。」【お前】(古今著聞集、巻第十七、596、459頁)
(13) (14) のような人称を指す例は、(12) のD群とともに、表3、4では別にして示す。

四 聞き手領域指示の形成

ソ系列による聞き手領域指示の用法成立には、次のような過程が考えられる。空間は、事物とは異なり、あらかじめ領域が設定されているわけではないため、境界の引き方が無限にある。その空間を表し分ける必要性から、指示詞の聞き手領域か否かによる使い分けは、場所指示においてまず発生する。その初期段階では、ソコなどの場所指示の形式において「あなた」及び「あなたの近くの場」「あなたの側」といった意味が広がる。そして再解釈により、ソ自体に聞き手領域のような意味が見出され、ソに聞き手領域という意味が焼き付き、他の形式にも反映されるというものである。

四・一 コ形の特異性

前節で聞き手領域指示の可能性が最も高いとしたC群を、形態面から整理したところ、次の表3、4のような分布となる。太枠で囲んだのは、場所指示の例である。

中古・中世に見られるソ系列の聞き手領域指示的な例の中で、場所指示は、14例中11例、そのうちソコは5例である。また、括弧内に掲げたD群および人称指示の例数から分かるように、早い段階で、聞き手とソコとが一定の勢力をもって結びついており、ソ系列においては、場所指示コ形が優勢である。

一方、表4に示す、カ(ア)系列の聞き手領域指示的な例には、場所指示のコ形は見当たらない。カシコ(アシコ)は聞き手領域とは関わりのないもので、多くは(15)のように、いわゆる現場とは異なる空間、もしくはその異なる空間にいる人物を指示している。

(15) a (少将)「帯刀」「口惜しう。かしこにはえ行くまじかめり。

この雨よ」【姫君のところ】(落窪物語、巻之一、58頁)

b (左大臣)「北の方は、うれしと思ひたりや。景純などは、思ひ知りためり」などのたまへば、「女君(左大臣)「かしこにもうれしとのたまふ時、多かめり」とのたまふ。【北の方】(落窪物語、巻之四、316頁)

c 年ごろよりもこよなう荒れまさり、広うもの古りたる所の、いとど人少なにきびしければ、見たしたまひて、
〔兵部卿官〕「かかる所には、いかでかしはしも幼き人の過ぐ

表3 【C群】聞き手領域指示的な例に見られるソ系列の形式

	ソノ	ソレ	ソコ	ソコラ	ソコモト	ソナタ	ソチ	計
竹取								0
伊勢								0
平中			(1)					0 (1)
大和			(1)					0 (1)
うつほ	(1)	(2)	1 (62)			(1)		1 (66)
落窪	1		(11)					1 (11)
枕	1	(1)	2 (1)		1			4 (2)
源氏		(1)	1 (11)			(1)		1 (13)
堤中								0
更級			(3)					0 (3)
讃岐		1	(1)					1 (1)
平家		1 (2)	1 (5)					2 (7)
宇治	1	1 (1)	(7)			1		3 (8)
古著	1	(5)	(2)					1 (7)
計	4 (1)	3 (12)	5 (105)	0	1	1 (2)	0	14 (120)

表4 聞き手領域指示的な例に見られるカ（ア）系列の形式

	カノ	アノ	カレ	アレ	カシコ	アシコ	カナタ	アナタ	カヤツ	計
竹取										0
伊勢										0
平中										0
大和	(1)		1							1 (1)
うつほ	1 (3)		1 (3)							2 (6)
落窪	1									1
枕	3		(1)	(4)						3 (5)
源氏	1		5 (1)	(1)						6 (2)
堤中	2									2
更級		(1)								0 (1)
讃岐										0
平家		1 (1)		6 (6)						7 (7)
宇治	(1)	(5)	(3)	(5)						0 (14)
古著				1 (4)						1 (4)
計	8 (5)	1 (7)	7 (8)	7 (20)	0	0	0	0	0	23 (40)

※表3、4の（ ）内は人称指示を行う例

※表3「うつほ」では人称指示を行う例を計66例としている。これは、表1のD群65例に、用例(13)を加えた結果である。

したまはむ。なほかしこに渡したてまつりてむ。〔…〕な

どのたまふ。【兵部卿宮邸（自邸）】（源氏物語、若紫、①

247頁）

さらに、カシコ（アシコ）には、狭義の直示空間（現場）を指

す、(16) のような遠称指示の例は極めて少ない。

(16) （高い所から僧坊を見下ろしていると）きよげなる童など

あまた出で来て、闍伽奉り、花折りなどするもあらはに見

ゆ。（供人）「かしこに女こそありけれ」【あそこに女がいる

ではないか】（源氏物語、若紫、①201頁）

表3、4で注意したいのは、聞き手領域に関する場所指示コ形

において、ソコが多く使われている、ということよりむしろ、カ

シコ（アシコ）が聞き手領域に使われないということである。で

は、ソコをはじめ、ソ系列の場所指示はどのように用いられてい

るのであるか。聞き手領域指示の発生経路を明らかにするため

に、それらの用法を検討する。

四・二 ソ系列の場所指示

四・二・一 ソコ

ソコという場所指示の形式が、ソ系列による聞き手領域指示の

先駆け的存在であるということは、先行研究においても、次のよ

うに指摘されている。⁽⁸⁾

(17) a ソコは無限の領域の一角を区切って指示するもので、対

象の多くは閉鎖的なまとまりを持つ先行文の内容全体であ

る。空間的指示では区切りの基準として聞き手への配慮があ

り、その結果場所指示においてまず中称的なソが現れた。

（橋本一九六六・三三八）

b 中古以降、〈略〉ソ系列には眼前の相手領域の対象を直

示する用法が現れる。その早い例としては、中古における

次のような「そこ」を挙げることができる。これは、二人

称代名詞として用いられている。〈略〉これは一種の尊敬

語で、間接的な表現によって敬意を表現したものであると

見られる。この種の「そこ」は、中古から比較的まとまっ

た数で観察される。（金水・岡崎・曹二〇〇二・二三三）

このようなソコの早い例に、(18) がある。ここでは、聞き手

の近傍にソコが用いられている。

(18) うちわたす遠方人にも申すわれ そのそこに白く咲ける

は何の花ぞも（古今和歌集、巻第十九、1007、読人しらず）

今回の調査範囲では、ソコがまず聞き手の現在占有している場

所を指す例が早くから見られる。

(19) a 「女は」せめて暗き方に入りたまへば、われ（兼雅）

も奥へ入りたまひぬ。〔兼雅↓子〕「あこはそこに。眠たから

む」とて【そこに】（うつほ物語、俊蔭、①103頁）

b 一人当千の兵ども、われもわれもと馬の頭をたてならべ

て、大將軍の矢おもてにふさがりければ、力および給はず、

〔教経〕「矢おもての雑人原、そこのき候へ」とて【矢の正

面の雑兵ども、そこをのきなさい】（平家物語、巻第十一、

嗣信最期、②353頁)

さらに、その場所を占める人物、つまり聞き手そのものを指す対称代名詞の用法も表3に示したとおり、中古、中世と見られる。

(20) a 「少将↓女君」知らぬわざしてまろもごうじになり。そこも寝ぶたげに思ほしためり。【そなたも眠たそうに思ひなさっているようだ】(落窪物語、第一、80頁)

b 「僧正↑上人」そこは貴き上人にておはす。【あなたは貴い上人でいらっしゃる】(宇治拾遺物語 下、142、卷二一ノ六、297頁)

ソコという形式は、カ(ア)系列の場所指示、カシコ(アシコ)との関係から見ても、ソ系列場所指示の中でも、いち早く聞き手に関係する空間(聞き手領域)と結びついたと考えられる。

四・二・二 ソレ

「聞き手側」の場所を区切るために用いられるソ系列の場所指示の形式には、ソコの他に、ソレも確認できる。次の(21)は、聞き手の占める場所を指しており、(22)は対称代名詞として用いられるソレの例である。

(21) 聞き手の占める場所

a 「墨染着たる僧↓侍」しはし、それにおはしませ。【そこ】

(宇治拾遺物語 上、78—1、卷五ノ九、145頁)

b 「義仲が牛車に上手に乗れずにいる」(牛飼↓義仲)「それに候手がたにとりつかせ給へ」【そこにある手形におつか

まり下さい】(平家物語、卷第八、猫間、②128頁)

(22) 対称代名詞

【兼大君】「かならず御みづから聞こしめし負ふべきこととも思ひたまへず。それは、雪を踏みわけて参り来たる心ざしばかりを御覧じわかむ御このかみ心にても過ぐさせたまひてよかし。【あなたは】(源氏物語、椎本、⑤299頁)

さて、金水・田窪(一九九〇・一九六)では、有標である対立型探索を発動させるにはキューが必要であることが述べられており、その代表的なものとして、「a. (現場での) 対象までの物理的距離 b. (現場での) 対象の操作可能性 c. 対象の所有・所属関係」などが挙げられている。次に挙げるソコは、聞き手が操作可能な対象を指示する例として解釈できる。

(23) 「軒端萩」碁打ちはてて結さすわたり、心とげに見えてきはぎはとさうどけば、奥の人はいと静かにのどめて、(空蟬↓軒端萩)「待ちたまへや。そこは持にこそあらめ、このわたりの劫をこそ」など言へど【お待ちなさいな。そこはせきでしように。このあたりの劫を先にしましょう。】(源氏物語、空蟬、①121頁)

(23) は囲碁をしている最中に、聞き手が手を出そうとしている、または出している、その手に近い空間を指し示している。この例は表1のC(会話文と地の文の境がないとした場合でも、先行文脈に先行詞なし)にあたり、聞き手の占める空間という意味から一歩進んでいる。「b. (現場での) 対象の操作可能性」にせ

よ「c. 対象の所有・所属関係」にせよ、聞き手と対象との物理的距離が近いという空間的な契機が本来あったからこそ、聞き手領域として認められるようになったと考えられる。

四・三 場所指示からの変化

ここまで見てきたように、ソ系列による聞き手領域指示の獲得においても、場所指示が果たした役割は大きい。また、現代語ソ系列の場所指示形式には、聞き手領域だけでなく、話し手・聞き手が同一視点にたった場合、融合型としてコとアとの中間あたりを指す、中距離指示の例も見られる。

(2) (郵便局までの道を聞かれ) そこの角を曲がって100 m先にあります。(再掲)

なお、中距離指示として用いられているとも見られる古代語のソ系列には、次のような例がある。

(24) 内外ゆるされたる若き男ども、家の子など、あまた立ちつづきて、「そこもとは落ちたる所侍り。あがりたり」など教へ行く。【そこのあたりは低くなっている所がございませす。そこは高くなっています」など教えながら行く。】(枕草子、116段、221頁)

聞き手の注意を促しており、この中距離指示が本来的な用法とは言えず、聞き手がいなければ用いにくいという報告(金水・田窪一九九二・一六九)とも一致している。また中距離指示に関しては、次の点も指摘されている。

(25) 指し示す対象の意味範疇に偏りはないか。やはり論者の内

省によると、場所を指し示す「そこ」「そのへん」等は中距離指示に用いやすいが、ものや人を指し示す「それ」

「その人」等の形式は用いにくいようである。(金水・田窪

一九九二・一六九)

中距離指示の用法が今後、広がっていくかどうかとは別に、こ

でも変化は場所指示から生じている。

ちなみに、次の例は、ソコという形式が独自に持つ用法である。

(26) A…もしもし、田中君ですか。

B…はいはい、山田君？ そこ、どこ？ (金水二〇〇〇：一

六二、(9))

(26) のソコは独り言に置き換えた場合であっても、ココやアソコにはならない特殊な例である(金水二〇〇〇)。このことから、空間を細かく区切っていくときには、ソ系列の場所指示の中でも、ソコが特に変化しやすいということが確認できる。ソコという形式に注目することにより、ソが聞き手領域という領域を指示するときに限らず、空間を何らかの目的で区切るときに活用された、もしくは活用されていることが推測される。

五 聞き手領域の成立過程

五・一 ソの領域の再解釈

ソ系列場所指示における意味拡張から、ソ系列全体に聞き手領域指示の用法が広がるようになるまでには、どのような仕組みが考えられるだろうか。聞き手領域の成立要因には、ソの領域の再解釈が考えられる。先に、ソ自体に聞き手領域のような意味が見出され、と述べたが、これには、金水（一九九）に指摘される文脈照応用法としてのソの性質も考えあわせる必要がある。

(27) コ・アとソでは、領域指定の部分とカテゴリー指定の部分

との重みにおいて違いがある。コ・アの指示詞表現にとつては、コ・アが指定する領域にその指示対象があらかじめ存在する、という「直示」に関わる部分が重要であり、カテゴリーの関数的な機能はあまり重要でない。〈略〉（コ・アは「筆者注」）実はカテゴリーは先行詞とまったく別のものになってしまっても、領域内に指示対象が存在するという含意に支えられて指示は成立する。一方、ソ系列、特にその文脈照応用法では、カテゴリーの関数としての機能、すなわちカテゴリーに合致する値を返す、という機能が重要であり、ソが領域として指定する言語的文脈は指示対象の存在を何ら保証しないのである。（金水一九九・七二）ソ系列が、本来、非直示、特に文脈照応用法中心であったとするならば、話し手との近接性をもって、現場指示を行うコ・カ

（ア）とは異なり、ソは現場での確たる領域を持っていなかったと考えられる。ソで切り取られる空間は、本来的には、中距離とも聞き手領域とも決定され得ないものであったが、日本語においては、聞き手への配慮を言語で表現しようという変化や、「あなた」という聞き手自身を指す働きとも結びつくことによって、聞き手領域という新たな意味が付与されるに至ったと考えられる。¹⁰⁾ もともと、話し手の領域とそれ以外の領域に二分されていた狭義の直示空間は、この変化を受けて、聞き手の領域を認め、それに従った言語現象が生じるようになる。ただし、言語現象においては聞き手の領域は後発的に認められたため、かなり時代が下るまで、カ（ア）系列は聞き手の領域から排除されなかったと言える。

五・二 カ（ア）系列の撤退

ソ系列が聞き手領域指示を形成し始めるのは、四節で見たとおり中古の場所指示形式からである。一方、中古・中世で確認できるカ（ア）系列の聞き手領域指示的な例は、人・物・事柄の指示にはば限られ、表4に示したように、人稱を指すものが多い。

(28) a人稱（呼びかけ）

〔女人↓弟子〕「あらかなし。我を助け給へ。あの御房」【そこのお坊様】（宇治拾遺物語 下、114、卷一三ノ四、345頁）

b人稱（未知のもの）

俊蔭、林のもとに立てり。三人の人、問ひていはく、「か

れは、何ぞの人ぞ。俊蔭答ふ、「日本国の王の使、清原の俊蔭なり。」【あなたはというお方か】（うつほ物語、俊蔭、①22頁）

c 事物（未知のもの）

量紙の手習などしたる、御几帳のもとに落ちたりけり。これはいかなる物どもぞと御心おどろかれて、〔右大臣↓尚侍の君〕「かれは誰がぞ。けしき異なる物のさまかな。たまへ。それ取りて誰がぞと見はべらむ」【それは誰のです】（源氏物語、賢木、②145頁）

カ（ア）系列は、聞き手領域か否かに関わらず、未知のものを指す例が多く、聞き手領域指示的な例に関しても、未知の対象を指す場合や呼びかけの際に、次第にその使用が限られていく。

六 まとめ

本稿では、まず中古から既に見られる聞き手領域指示的な例を検討し、会話文と地の文との境界があいまいな中古・中世の資料において、聞き手領域のソ系列を認めるための分類方法を提示した。その結果、解釈上のグレーゾーンが多く、実際に聞き手領域指示を担うソ系列の例が多くないことを述べた。

次に、この点を踏まえ、聞き手領域指示形成の初期段階に見られる例を中心として、聞き手領域指示が、ソ系列の用法の場所指示から生じる様子を確認した。直示空間から聞き手の占有空間を足掛かりに指示を行っていたソ系列は、聞き手との関わりを支え

にして、指示詞における聞き手領域を形成する。すなわち、それまで話し手基準で、話し手からの遠近によって区分されていた直示空間の指示方法に対し、聞き手領域か否かによる使い分けが指示詞に生じることを示した。その際、従来からの指摘に加え、カ（ア）系列の場所指示と対比させることにより、カ（ア）系列が聞き手領域から排除されている様を明らかにした。

聞き手の領域を軸に、文脈照応用法や観念用法など、指示詞においては、他の用法も変化している。今後の課題として、これらの変化を踏まえ、古代語の指示の様相を明らかにしたい。

注

(1) (i) のような例を直前に談話が想定できるものとして分類した。

(i) 昔、空也上人、申すべき事ありて、一条大臣殿に参りて、藏人所に上りてゐたり。余慶僧正また参会し給ふ。物語などし給ふ程に、僧正のたまふ。〔僧正↓空也上人〕「その臂はいかにして折り給へるぞ」〔手治拾遺物語 下、142、卷一二ノ六、369頁〕

(2) 会話文と言っても、例えば『竹取物語』では、次のように「談話」というよりも「語り」の場面があるが、今回は、これらを分けて扱っていない。

(ii) ふと、山の中に入りぬ。その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金、銀、瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋わたせり。そのあたりに照り輝く木ども立てり。その中に、この取りて持ちてまうで来た

しはいとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。(竹取物語、32頁)

- (3) 中古資料については、『うつほ物語』『落窪物語』が書かれたと推定される90年頃に、平安第一期・第二期とする捉え方がある(金水一九八三・二〇〇五)。確実に女性を書き手とする作品が残されるようになった時期から平安第二期として区分したものである。そして金水(二〇〇五)では、「をり」を中心に次のように述べられる。

(Ⅲ) 和文資料における「をり」の現象は女性の書き手によって当時の話し言葉が積極的に文体に取り込まれていたことと反映と見ることができよう。語彙の変化がその時期に起こったと言うよりも、すでに起こっていた変化の文獻への反映がその時期に起こった、と考えるのである。(二二六頁)

本研究の結果もこの時期の資料に現れる例数の違いから、同様の変化が期待できる。もしこの考えに則るのであれば、ソ系列によって聞き手の領域にあたる対象を指すということが、当時の話し言葉において既に用いられていたと見ることもできる。

ただし、『うつほ物語』のみは平安第一期ではなく、第二期よりの結果が出ているため、表1は、二箇所太線を入れて区切っている。

- (4) 「ソコハカトナシ」については、岡崎(二〇〇六)で、中古に既にこの形が慣用的な表現へと偏りつつあることが指摘されているため、会話文中に現れるソとして含めていない。

- (5) (7a) は観念用法とも文脈照応用法ともとれる例である。表1、2《その他》には含まれないが、観念用法には他に、次のような例がある。

(iv) (扇を取り交わした相手を探して歌を詠む)(女・返歌)
「心いる方ならませばゆみはりのつきなき空に迷はまじやは」

といふ声、ただそれなり。【声は、紛れもなくあの人だ】(源氏物語、花宴、①366頁)

- (6) カノにも、2例、次のような場所指示ともとれる例がある。

(v) (仲忠↓仲意)「今、かの殿にさぶらはむ」(うつほ物語、俊隆、①120頁)

(vi) (殿(道隆))「あれは誰そや。かの御簾の間より見ゆるは」(枕草子、第100段、203頁)

- (7) 以下は、会話文と見なせる文中に現われるカシコ(アシコ)の総数である。

(カシコ) 平中2 うつほ84 落窪10 源氏35 更級1 堤中6
平家1 宇治7 古著3

(アシコ) うつほ6 源氏1 宇治2
(アソコ) 平家3

- (8) ただし、ソコにも、次のように文脈照応用法の例はある。

(vii) (中将↓常刀)「この車のおり所見て告げよ。そこにあるむ」
【この車が降りたところを見て知らせよ。その所に居座ろう。】(落窪物語、巻之二、173頁)

- (9) 金水・田窪(一九九〇・九六)では、対立型を誘引する要因として、a < c 以外に、「d. 経験スペースの要素との同定の不可 e. 談話への導入者優先の原則 f. 対象に関する情報の多寡」が挙げられている。

- (10) この推測は、中称の指示詞が、通言語的に見て、近称・遠称の指示詞の機能の隙間を埋めるように発達してきており、言語によって発達の方向性がかなり異なるものになる(金水・岡崎・曹二〇〇二・二四三)ということとも合致する。また Fillmore (1982) の類型論的研究によると、諸言語の中でも、三種類の指示詞をもつものには、人称区分に基づくものと距離区分に基づくものの2種のプロトタイプがあることが報告されている。

調査資料

竹取物語・伊勢物語・平中物語・大和物語・うつつは物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・堤中納言物語・更級日記・讃岐典侍日記・平家物語・古今和歌集（以上、新編日本古典文学全集）
宇治拾遺物語（新日本古典文学大系）
寛一本平家物語・古今著聞集（日本古典文学大系）
延慶本平家物語（勉誠社）

参考文献

岡崎友子（二〇〇一）「指示副詞の歴史的变化について—サ系列・ン系を中心に—」『国語学』53-3（210）pp. 1-17『国語学会』
岡崎友子（二〇〇六）「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について—ン系（ン・サ系列）指示詞再考—」『日本語の研究』2-2, pp. 77-82『日本語学会』
迫野虔徳（二〇〇一）「指示詞におけるコンアド体系の整備」『語文研究』94, pp. 1-12『九州大学国語国文学会』
清水功（一九六二）「中古・上古の「ン」系指示語について—上古指示体系考察の一環として—」『名古屋大学国語国文学』10, pp. 1-10『名古屋大学国語国文学会』
金水敏（一九八三）「上代・中古のキルとヲリ—状態化形式の推移—」『国語学』134, pp. 1-16『国語学会』
金水敏（一九九九）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の關係について」『自然言語処理』6-4, pp. 67-91『言語処理学会』（二〇〇〇）「指示詞—直示再考—」中村明編『現代日本語必携』別冊國文學 No. 53, pp. 160-163『學燈社』

金水敏（二〇〇六）『日本語存在表現の歴史』、ひつじ書房
金水敏・岡崎友子・曹美庚（二〇〇二）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語—」生越直樹（編）『対照言語学』シリーズ言語科学4, pp. 217-241『東京大学出版会』

金水敏・田窪行則（一九九〇）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」日本認知科学会編『認知科学の発展』3, pp. 85-116『講談社』（金水敏・田窪行則編（一九九二）『指示詞』、日本語研究資料集【第一期第7巻】、ひつじ書房, pp. 123-149, 再録）

金水敏・田窪行則（一九九二）『解説篇』日本語指示詞研究史から／／金水敏・田窪行則編『指示詞』、日本語研究資料集【第一期第7巻】、ひつじ書房

金水敏・田窪行則編（一九九二）『指示詞』、日本語研究資料集【第一期第7巻】、ひつじ書房

橋本四郎（一九六六）「古代語の指示体系—上代を中心に—」『国語国文学』35-6, pp. 329-341『京都大学文学部国語国文学研究室』

橋本四郎（一九八二）「指示語の史的展開」『講座日本語学』2, pp. 217-240『明治書院』

藤本真理子（二〇〇七）「ン系列の現場指示用法の発生」日本語法学会第8回大会パネルセッション「日本語指示詞の歴史的探究—「源氏物語」を中心に—」『日本語文法学会第8回大会予稿集』pp. 104-112

Charles J. Fillmore (1982) 'Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis', Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds) *SPEECH, PLACE, AND ACTION*, Studies in Deixis and Related Topics, pp. 31-59

付記・本稿は日本語文法学会第8回大会（平成一九年一〇月二八日於筑波大学）及び平成二〇年度大阪大学国語国文学会（平成二〇年一月一二日）での口頭発表に基づく。

— 本学大学院博士後期課程 —